

<ワン・ポイント・レクチャー> こども未来コース(応用編)

第5回:思春期の“厄介さ”は“ころ”の厄介さ

家族の一員が重い病気になった時、特に思春期にある子どもたちや若い子どもたちの気持ちがどのようになるのか、どのようになっていくのかについての法則や理論なんて存在しません。一人ひとりが辿ってきた人生の“轍”も異なりますし、当然、それまでの経験が異なりますので、価値観や考え方、自らを守る術(防衛機制)も違うからですね。

思春期(10歳くらいから19歳くらいまで)になると、社会的にも性的にも自己愛的な段階に入ります。大人として扱ってほしいという思いが強くなるために保護者や教師に反抗したり抵抗したりしますが、かと言ってまだまだ保護者に甘えていたいという思いも強く持っていますので依存的、退行的になったりと、保護者から子どもを見ると、何やら“矛盾の束”の中に見えるように見えています。

逆に子どもの側に立つと、自己愛的な思春期に入るのは、もちろん本人の意思ではありません。かと言って、それでも十分な“成長”を待つことなく“否応なし”に思春期に入っていきます。そのような反発・抵抗と依存・退行といった矛盾した言動をどのようにコントロールすればよいか分からず、子ども自身も戸惑っているというのが実情なんです。

でも、思春期におけるこのような傾向は、極めて正常なことなんです。

もし、子どもたちが成熟した人間関係を通じて周囲の人たちから心理的な栄養を吸収したり独り立ちが出来るようにならなければ、年相応に行動することが出来ず、幼い頃に不安を処理した方法(行動でもってストレスを発散させる)で適応しようとしてしまいます。こうした場合、幼児に示すような暖かさや支持を周囲の大人が与えるならば、子どもたちは比較的容易に不安から脱却することが出来ます。

もしかすると、思春期に入ることによって、保護者が“大人”であるかどうかを試しているとも言えるのかもしれませんがね。